ボイスドラマ「トラモント劇場で役者は廻る」台本

【登場人物】

ジャンカルロ：ホテル経営者
アントニー：脚本家
ヴァレンティーヌ：ジャンカルロが面倒を見ている女性
ロベルタ：トラモント劇場支配人
リリー：新人バレリーナ
シルヴィア：脚本家志望の劇場売り子
フィオレンツァ：ロベルタの娘
ユーリ：ジャンカルロの部下
マリエッタ：若手女優
エルダ：精神科医
クレオ：ジャンカルロの妹
ルイーザ：ルカの双子の姉
ルカ：ルイーザの双子の弟
サンドラ：ロベルタの秘書
ノーラ：ホテルの雇われ支配人
イルマ：フィオレンツァのメイド
オンディーナ：シスター

SE：紙ペラ

シルヴィアN「私が彼らと出会ったのは、春が始まる少し前。黄昏時の切なさを連れて、彼らは舞台に上がった」

※トラモント劇場廊下
SE：ロベルタとサンドラの足音

ロベルタ「今日の公演の客入りはどうだい？」
サンドラ「七割ほど埋まっています。ここ半期では最低ですね」
ロベルタ「あー……ちょーっと難しい内容になった途端、来なくなるんだからね。客のレベルも落ちたもんだよ」
サンドラ「だから『彼』に頼んだのでしょう？」
ロベルタ「ああ。ちょうど提携先になってくれる相手も決まったしね。これで回復を狙うよ」

※ジャンカルロのホテル最上階、ヴァレンティーヌの部屋

ユーリ「……ヴァレンティーヌ」（眠っているヴァレンティーヌを見つめている。ここのシーンは素の話し方で）

ＳＥ：ジャンカルロの足音

ジャンカルロ「ユーリ……ユーリ」
ユーリ「（気づいて）は、はい」
ジャンカルロ「自分の名前も忘れたのか？」
ユーリ「すみません……」
ジャンカルロ「ヴァレンティーヌの様子はどうだ？」
ユーリ「……今日は、ずっと眠っています」
ジャンカルロ「そうか……後でエルダが来るだろうから、お前はもう休むといい」
ユーリ「ありがとうございます、ジャンカルロ」
ジャンカルロ「……ユーリ。例の件、頼んだぞ」
ユーリ「……はい」
ジャンカルロ「――やっと、始められる」

ジャンカルロＮ「ボイスドラマ『トラモント劇場で役者は廻る』」

※劇場応接室

ノーラ「こうして四人で顔を合わせるのは、初めてですね」
サンドラ「……何を仰っているんですか」（隠しつつも鬱陶しそうに）
ロベルタ「親戚の集まりのときみたいなことを言うね、キミは」
ノーラ「いとこはともかく、はとこと初めて会ったのが親戚の葬式っていうの、よくありますよね」
ロベルタ「ジャンカルロ、キミはホテルの支配人にする人物を間違えたんじゃないのか？」
（呆れて）
ジャンカルロ「そんなことはありませんよ。ノーラは私が見つけた候補者の中でも一番優秀

です。ユニークですし」
ロベルタ「はっ、キミにもユーモアのセンスがあるようだ。……それにしても、キミは経営者にしては随分若いね。驚いたよ」
ジャンカルロ「ここまでのやり取りはノーラに任せきりでしたからね。ロベルタ支配人には大した挨拶も出来ず、申し訳なかった」
ロベルタ「いいんだ、気にしないでくれ。こんな人気のない中劇場に力を貸してくれるなんて、それだけで願ったり叶ったりさ。せっかく劇場を建て直したっていうのに、客の入りが悪くてね。困っていたところなんだ」
ジャンカルロ「確か、七年前に火事があったとか。大変でしたね」
ロベルタ「ああ、本当にね。かなり胃が縮んだよ」
ジャンカルロ「ですがタイミングが良かった。私としても、このあたりにホテルを建てたいと思っていたところだったので。誘いを受けてくださって感謝しています」
ロベルタ「観光客やうちの客がキミのホテルを利用する……素晴らしい相互作用だ。幸い街だけは栄えてるからね、きっと上手くいくだろう」
ノーラ「支配人、やけに嬉しそうですねえ……あ、私も支配人だったか。ややこしいなぁ」
サンドラ「……本当に、この方にホテルをお任せして大丈夫なんですか？」
ジャンカルロ「ええ、多分ね」
ロベルタ「多分」
サンドラ「多分……」
ジャンカルロ「というのは冗談ですが……ロベルタ支配人が上機嫌な理由、私も気になります」
ロベルタ「ああ、実は新作劇の制作が始まってね。今話題の若手脚本家を雇ったんだ。この後会う予定だよ」
ジャンカルロ「へえ、何という方です？」
ロベルタ「アントニー・フォルツァーノ。ご存知かな？」
ジャンカルロ「……いいえ、失礼ながら。どうやら私も勉強不足のようだ」

※応接室前廊下
ＳＥ：ドアが閉まる

ノーラ「いやーちっちゃかったですね、ロベルタ支配人。ほんと何度見ても子どもにしか見えませんよ」
ジャンカルロ「部屋を出た直後によく言えるな、君は」
ノーラ「悪口じゃありませんよ。私、あの人好きですもん。面白いし」

ジャンカルロ「……確かに、興味深い人だったな」（ほくそ笑む）

ＳＥ：二人、歩き出す

ノーラ「そういえば、ボスはこの近くに建てたっていうホテルにご家族と住んでるんですよね？　最上階に」
ジャンカルロ「ボスはやめてくれ……まあな」
ノーラ「いいなぁ、ワンフロアまるまるですか。ほんと、ボスって何者なんです？」

ＳＥ：足を止める

ジャンカルロ「それが君に関係あるのか？」
ノーラ「いいえ」
ジャンカルロ「なら、余計なことを気にする前にホテルの備品を揃えることだ。注文書のベッドシーツの欄、ゼロが一つ足りなかったぞ」
ノーラ「えっ、マジですか！？」
ジャンカルロ「嘘だ」

ＳＥ：再び歩き出す

ノーラ「……わかりましたよ、もう機嫌直してくださいってば！」

※応接室

アントニー「ご無沙汰しております、支配人」
ロベルタ「やあ、半年前のパーティー以来かな。サンドラのことは覚えているかい？」
アントニー「ええ……僕がシャンパンを彼女のドレスにかけてしまって。その節は申し訳ありませんでした」
サンドラ「いいえ、そのおかげで今回のお話に繋がったわけですから」
アントニー「そう言っていただけると助かります。貴女方と出会えて、オファーまでいただけて……幸運でした」
ロベルタ「それにしても、今までパリにいたのに、どうしてこっちの仕事を引き受けてくれたんだい？」
アントニー「もともと生まれがこっちなんです。だからたまに帰ってみようかと思いまして」

ロベルタ「ああ、なるほどね。ワタシはてっきり、『女』が原因かと」
サンドラ「支配人」（軽くたしなめる）
アントニー「……と、言いますと？」
ロベルタ「色々と変な噂を耳にするからね。キミはかなりモテるそうじゃないか」
アントニー「ふふ、噂はただの噂ですよ。僕にはちゃんとした相手がいますから」
ロベルタ「おや、そうなのかい？」
アントニー「少し前に突然僕のもとを去ってしまったんですが……」
ロベルタ「あらまあ、喧嘩かな？」
アントニー「ええ、そんなところです」
ロベルタ「恋人とは仲良くしておくものだよ。まあ、夫と別れた私が言うのも説得力がないけどね」
アントニー「喧嘩ですか？」
ロベルタ「そんなところだ」
サンドラ「しかしアントニーさん、その状況はもう別れたということになりませんか？」
アントニー「僕は諦めていないので、一応まだ恋人ということで」
サンドラ「……どうして今日は変人ばかり来るんだ」（ぼそっと）
ロベルタ「まあ何はともあれ、ワタシは良い作品を書いてくれればそれでいいよ。いつ頃できそうだい？」
アントニー「実はもう、脚本は仕上がってるんです。あとは役者を決めるだけで」
ロベルタ「仕事が早いね。後で読ませてもらおうか」
アントニー「ええ、もちろん」
ロベルタ「部屋は……本当にうちの使用人部屋でいいのか？　提携したばかりのホテルを借りることもできるけれど」
アントニー「劇場で住み込みで働くって、昔から憧れていたんです。ですので、ぜひここでお世話になれればと」
ロベルタ「そうか、そういうことなら喜んで貸そう」
アントニー「ありがとうございます。（ソファから立ち上がりながら）では、僕はこれで。また後ほど」

ＳＥ：アントニー、部屋を出て行く

ロベルタ「……サンドラ」
サンドラ「はい」
ロベルタ「念のため、アントニーを探ってくれ」
サンドラ「え？」
ロベルタ「少し……気になることがあってね」

※劇場廊下
ＳＥ：リリーの足音

リリー「……（しょぼんとした溜息）」

ＳＥ：近づいてくるアントニーの足音

リリー「（驚く）……！　お、叔父様！」
アントニー「……リリーか。今、公演終わったところ？」
リリー「え、ええ。……どうして、叔父様がここに……？」
アントニー「ここでやる新作劇を書くことになってね」
リリー「そうなの？　嬉しいわ。叔父様、ずっとパリで活動してらしたから、なかなか観に行けなかったの。でも、ここでなら……」
アントニー「リリー」
リリー「……はい」（きょとんと）
アントニー「ここでは叔父と姪ではなく、脚本家とバレリーナだ。その意味がわかるね？」
リリー「っ……はい。ごめんなさい」

※劇場廊下
ＳＥ：シルヴィアの足音

フィオレンツァ「シルヴィア！」
シルヴィア「ひゃっ……！」
フィオレンツァ「あ、ごめん。そこまで驚かせるつもりはなかったんだけど……」
シルヴィア「もう、フィオレンツァたら。気をつけて」
フィオレンツァ「えへへ……売店の仕事、終わった？」
シルヴィア「ええ……でも公演に人気が出ないと、グッズの売れ行きもなかなか……」
フィオレンツァ「大丈夫よ。だって次は、あのアントニー・フォルツァーノが書くんだもの！　それでね、実はさっきその人見ちゃったの！　すっごくハンサムだった……！」
シルヴィア「お、大きな声出したら響いちゃうわよ……！　でも、あのアントニー様がいらっしゃるなんて……私、夢をみているみたい」

フィオレンツァ「シルヴィア、アントニーのこと大好きだもんねー」
シルヴィア「あ、あくまで作品に対してよ？　彼の書く話はとっても美しくて、けれどどこか儚くて……物語全体を通しての空気感が、劇場自体を包み込んでくれるの」
マリエッタ「……シルヴィア」
シルヴィア「はっ、はい！」

ＳＥ：マリエッタの足音

マリエッタ「アタシのブロマイド、今日は何枚売れたの？」
シルヴィア「え、えっと……」
マリエッタ「何枚？」
シルヴィア「……三枚、です」
マリエッタ「はあ？　三枚！？　何よそれ！　あんなに大きい拍手送ってきたくせに、アタシのグッズはいらないってわけ？」
シルヴィア「わ、私に言われても……」
フィオレンツァ「あ、あのっ！」
マリエッタ「ん？　何よ」（苛立ったまま）
フィオレンツァ「あたし、マリエッタさんのお芝居大好きなんです！　いつも舞台観てると き、マリエッタさんにばかり目がいっちゃって。本当に凄いなーって思ってて」
マリエッタ「え？　あ、そう……」
フィオレンツァ「これからも応援してます」
マリエッタ「っ……ありがと」（照れつつぶっきらぼうに）

ＳＥ：マリエッタ、去っていく

フィオレンツァ「いつもツンツンしてるけど、可愛い人だよねえ」
シルヴィア「……ええ、そうね。ちょっと怖いけど」
フィオレンツァ「……ん？　あれって……」
アントニー「それじゃ、しっかりやりなさい」（遠くでの会話）
リリー「はい。ありがとうございます、叔父様」（〃）

ＳＥ：アントニー、去っていく

シルヴィア「どうしたの？」
フィオレンツァ「あの子……リリーだっけ？　話してる相手、アントニーだよ」

シルヴィア「えっ！」

ＳＥ：リリーに駆け寄るシルヴィアとフィオレンツァ

シルヴィア「リリー！」
リリー「シルヴィア……それにお嬢様まで。どうしたんですか？」
シルヴィア「さっき、叔父さんって言ってたけど……もしかして」
リリー「……ええ。アントニー叔父様は、わたしの母さんの弟さんよ」
フィオレンツァ「そうなのね！　ここで会ったのって偶然？」
リリー「そうです、お嬢様」
フィオレンツァ「いいわよ、フィオレンツァで。支配人の娘ってだけで、貴女たちより年下なんだから」
リリー「ええと……わかったわ」
フィオレンツァ「アントニーさんとはたまに会うの？」
リリー「いいえ、久々よ。最後に会ったのは、四年前の公演で楽屋を覗かせてくれたときだったわ。でも、そのときとは少し様子が違っていたというか、前はもっとお優しかったのに……」
シルヴィア「急に冷たくなったの？　もしかして、貴女がプロになったから？」
リリー「そうかもしれない。今は他人だって言われてしまったの」
フィオレンツァ「そう、それは寂しいわね……」
リリー「わたしは叔父様のことを尊敬してるし、いつか一人前のバレリーナとして認めてもらいたいと思ってる。けど……わたしは周りと比べて背が低いから、踊っても目立てないわ」
シルヴィア「リリー……」
リリー「他の子と並ぶと惨めになるの。今日の公演も、それが気になって……」
イルマ「お嬢様ー！　お嬢様ー！」（遠くから）
フィオレンツァ「げっ……」

ＳＥ：駆け寄ってくるイルマ

イルマ「あ、見つけましたよ！　お嬢様、学校の課題がまだ終わっていないでしょう！　早く片付けないと、おやつのタルトは抜きですからね！」
フィオレンツァ「酷い！　イルマの鬼メイド！」
イルマ「鬼とメイドの両方の属性は少々重たいです。さあ、お部屋に戻ってください！」
フィオレンツァ「むー……ごめん、あたしもう行くね」
シルヴィア「あ、うん」

ＳＥ：フィオレンツァとイルマ、去っていく

リリー「……ごめん、シルヴィア。暗くなるようなこと言って」
シルヴィア「気にしないで。あのね、リリー。私、友達として貴女のこと応援してるわ。私も脚本家になりたいけど、応募しても全然賞に入れないから。リリーはプロになれたんだもん、その時点で凄いよ」
リリー「……ありがとう。わたしも、シルヴィアのこと応援してる」

※劇場前歩道
ＳＥ：雑踏、リリーの足音

リリー「……わたし、どうしてネガティブなことばかり言っちゃうんだろう……あーもう、ほんと嫌……」（独り言）
ユーリ「――すみません、少々よろしいですか？」（ここから青年モードでお願いします）
リリー「え？　あ……」
ユーリ「こんにちは、お嬢さん。少々道を伺いたいのですが……」

※カフェ
ＳＥ：グラスをテーブルに置く

リリー「すみません、ご馳走していただいて……」
ユーリ「いえいえ、ここまで道案内していただいたお礼です。ずっと行きたかったカフェなので、来れて良かった」
リリー「実はわたしも気になってたんです。雑誌で見て、お洒落な所だなぁって思って。……あ、あの……間違いだったら本当に申し訳ないんですけど。男の人……ですか？」
ユーリ「ええ、そうです。よく女性と間違われますけど」
リリー「わかります。こんなに綺麗な男性、初めて見ましたもの」
ユーリ「えっ……？」
リリー「あっ……ごめんなさい！　わたしったら、失礼なこと……」
ユーリ「……ふふ、構いませんよ。貴女はこのあたりにお住まいなんですか？」
リリー「ええ、近くのアパートに」

ユーリ「お仕事は何を？」
リリー「えっと……一応、バレリーナを」
ユーリ「おや、それは素敵ですね」
リリー「でも、まだ新人で。舞台の端っこで踊ってるだけですから」
ユーリ「舞台に必要じゃない役者や踊り子なんていません。貴女が努力した結果、必要とされて舞台に立っているんです」
リリー「……ユーリさん」
ユーリ「それに、努力をする女性はとても美しい……リリー、貴女も」

※教会
ＳＥ：オンディーナの足音

オンディーナ「こんにちは。今日もいらしてくださったんですね」
ジャンカルロ「……失礼、貴女にお会いした記憶が……」
オンディーナ「直接お話しするのは初めてですわ。近頃よく貴方がお祈りされるのを見かけていたんですの」
ジャンカルロ「そうでしたか」
オンディーナ「申し遅れました、わたくしはオンディーナと申します。最近になってお見かけするようになったということは、この街には……」
ジャンカルロ「ええ、少し前に引っ越してきました」
オンディーナ「まあ、信心深い方は大歓迎ですわ」
ジャンカルロ「……シスターの前で言うのは心苦しいですが、実はそうでもないんですよ」
オンディーナ「あら、そうなんですの？」
ジャンカルロ「私はただ、都合の良いときだけ神に祈る愚か者です」
オンディーナ「……愚者には本来、欲も野心もありません。ですから平穏な人生を歩むことができると言われています。それも悪いことではないでしょう」
ジャンカルロ「……困りましたね、私の心は欲まみれでした」
オンディーナ「でしたら、貴方は愚者ではないということですわ」
ジャンカルロ「ふっ……面白い方ですね」
オンディーナ「今後も主（しゅ）に恥じないよう生きてまいりますわ。主は、わたくしたちの言動すべてに目を向けてくださっているのですから。努力も、怠惰も」
ジャンカルロ「……それは怖いな」

※ホテル、ヴァレンティーヌの部屋
ＳＥ：ドアを開ける

エルダ「ああ、おかえりなさい」
ジャンカルロ「ただいま。……ヴァレンティーヌは？　起きてるのか？」

ＳＥ：ヴァレンティーヌ、起き上がる

ヴァレンティーヌ「ん……おはよう」
ジャンカルロ「おはよう。いつもより顔色がいいな」
ヴァレンティーヌ「エルダのおかげよ。美味しいクッキーをくれたの」
エルダ「栄養がたっぷり入った、私のお手製クッキーよ」
ジャンカルロ「何を入れたんだ？」
エルダ「ほうれん草にチーズ……それから小魚なんかも。何種類か作ったのよ」
ヴァレンティーヌ「本当にエルダは料理が上手ね」
エルダ「ありがと。ねえ、ヴァレンティーヌ。ちょっとジャンカルロに話があるから、少し席を外してもいいかしら？」
ヴァレンティーヌ「大丈夫よ。……私、今日はいい子だから」

※リビング
ＳＥ：ジャンカルロとエルダ、ソファに腰を下ろす

エルダ「ごめんなさい、急に」
ジャンカルロ「……ヴァレンティーヌのことか」
エルダ「ええ。七年前に精神疾患にかかってから、今まで治療を重ねてきたけれど……あの子、最近少しずつ変わってきているみたいなの」
ジャンカルロ「元に戻りつつあるってこと？」
エルダ「そんな気がしていて……でも、私はこうなる前のあの子を知らない。だからジャンカルロ、貴方がよく見てあげて」
ジャンカルロ「わかった。……エルダが医者で良かったよ」
エルダ「医者でも医者じゃなくても、私は貴方たちの役に立ちたいわ。大切な家族だもの」

ＳＥ：クレオの足音

クレオ「お兄さま！」
ジャンカルロ「クレオ」
クレオ「あのね、クレオこのおうち気に入ったわ。こんなに広いんだもの」
ジャンカルロ「それは良かった。最上階の部屋は好きに使ってくれて構わないよ。けど、外に出るときは必ず、エルダかルイーザかルカと一緒に行くこと。わかった？」
クレオ「ヴァレンティーヌは？」
ジャンカルロ「それは……駄目だ」
クレオ「えー、どうして？」
ジャンカルロ「彼女は……彼女にはまだ、休憩する時間が必要だからだよ」
クレオ「うーん、クレオには難しいわ」
ルイーザ「クレオ！」（遠くから）

ＳＥ：ルイーザとルカの足音

クレオ「あ、ルイーザ、ルカ。どうしたの？」
ルカ「急にいなくなったから心配したよ」
ルイーザ「一人でどこかにいっちゃったのかと思ったわ」
クレオ「えへへ、かくれんぼするほど子どもじゃないよぉ。ねえ、今から温水プールで遊ぼう！」
ルカ「あっ、ちょっと待ってクレオ！」

ＳＥ：駆け出すクレオとルカ

エルダ「そんな設備まで買ったの？」（ジャンカルロにぼそっと）
ジャンカルロ「ああ、この場所に飽きないように」
ルイーザ「……」
ジャンカルロ「……どうした、ルイーザ」
ルイーザ「あ……ううん、何でもない」

※アントニーの部屋

ＳＥ：ドアノック

アントニー「どうぞ」

ＳＥ：ドアが開き、シルヴィアが入ってくる

シルヴィア「失礼します。あの、ロベルタ支配人にコーヒーを持っていくよう言われて……」
アントニー「ああ、ありがとう。でも、どうして君が？」
シルヴィア「えっと……多分、気を遣ってくださったんです。私が……アントニーさんのファンだから」
アントニー「……」
シルヴィア「私、貴方みたいな脚本家になりたいんです。……まだスタートラインにすら立てていないですけど」
アントニー「……そう」
シルヴィア「……」（何を話せばいいのかわからない）
アントニー「……コーヒー、もらえる？」
シルヴィア「えっ？」
アントニー「冷めちゃう前に飲みたいから」
シルヴィア「あ、は、はいっ」

ＳＥ：コーヒーをテーブルに置く

アントニー「……同業者を目指すなら、『ファン』って言わないほうがいい」
シルヴィア「え……」
アントニー「隣に立とうとするなら『ライバル』になるつもりじゃないと、互いに良い影響は生まれないからね」
シルヴィア「……あの、一つ伺ってもいいですか？」
アントニー「どうぞ」
シルヴィア「リリーに冷たくするのは、彼女のため……ですよね？」
アントニー「……どうしてそう思ったの？」
シルヴィア「私は彼女の友人ですから。わかります」
アントニー「……あの子はコンプレックスを過度に気にして、自ら成長の妨げにしている」
シルヴィア「身長のこと、ですね」
アントニー「そう。確かに周りと比べると、彼女よりも背が低いバレリーナはほとんどいないだろう。でも、舞台は彼女が掴んだ居場所だから。……一部では、僕のコネクションだと言う奴らもいるけれど」
シルヴィア「じゃあもしかして、そうだと思われないためにも？」
アントニー「ああ」

シルヴィア「……優しい方なんですね」
アントニー「そうかな、わりとあっさりしたほうだと思うけど」
シルヴィア「それに、私にもアドバイスありがとうございます。私、いつかアントニーさんと同じ世界で戦います」
アントニー「……これからも姪をよろしく。ええと……」
シルヴィア「シルヴィアです」
アントニー「シルヴィア」
シルヴィア「新作劇、楽しみにしています」（微笑んで）
アントニー「……君は、笑ったほうがいい」
シルヴィア「え？」
アントニー「前髪も、ほら……横に寄せて」（ややセクシーに）

ＳＥ：布擦れ

シルヴィア「っ……あ、あの、私……失礼します！」

ＳＥ：シルヴィア、部屋を出て行く

アントニー「……」

※アントニーの部屋前

シルヴィア「っ……びっくりした」
マリエッタ「男性経験のない貴女には、あれだけで刺激が強いの？」
シルヴィア「……！　マリエッタさん、いつの間に」
マリエッタ「ちょっと彼に話があってね。そしたら聞こえてきちゃったから。ほんと、使用人部屋って壁もドアも薄いわぁ」
シルヴィア「……」
マリエッタ「彼、セクシーよね」
シルヴィア「えっ……」
マリエッタ「まあ、貴女みたいな子どもなんて相手にされないだろうけど」
シルヴィア「そんなんじゃ……っていうか年は一つしか変わらないけど……」
マリエッタ「っ……別にどうでもいいでしょ！　貴女とアタシじゃ立場が違うのよ、立場が。ほら、どいて頂戴。貴女の用事はもう済んだでしょ」

シルヴィア「は、はい……」

※アントニーの部屋
ＳＥ：ノック、ドア開ける

マリエッタ「こんにちは、アントニー」
アントニー「君は……誰だったかな」
マリエッタ「っ、アタシのことを知らないって仰るの？　（咳払いして）アタシはマリエッタ。今をときめく人気女優よ」
アントニー「それで、売れない人気女優さんが僕に何の用？」
マリエッタ「あ、貴方ね……まあいいわ。率直に言う。貴方が書いた新作劇の主演、アタシにやらせて」
アントニー「……どうして君は、自分が主演に相応しいと思ったの？」
マリエッタ「アタシは何にでも化けられる。それに……官能的だからよ」

ＳＥ：アントニーに触れるマリエッタ。その手を掴んで拒むアントニー

マリエッタ「っ……」
アントニー「色恋営業の芝居も演出も、まだまだみたいだけど」
マリエッタ「はっ……女には緩いって噂、聞いたんだけどな」
アントニー「噂は噂だ。それに君には興味がない。けれど……僕の言うことを聞いてくれたら、主役の座は考えてあげてもいい」
マリエッタ「……驚いた。アタシ、もうこの世界から干されるとばかり」
アントニー「そんなこと思ってないくせに。……マリエッタ、僕と取引をしよう」

※支配人室

ロベルタ「良い報告？　悪い報告？」
サンドラ「……悪いほう、でしょうか」
ロベルタ「（溜息をついて）……気は進まないけど、聞こうか」
サンドラ「各地の劇場関係者を当たって調べたところ、どうやらアントニーさんは……七年前の火事について情報を集めているようです」

ロベルタ「……！」
サンドラ「彼に女性関係の噂が多く付きまとったのも、その……情報を手に入れるために近づいたからかと」
ロベルタ「あー……あいつならやりかねないね。……サンドラ」
サンドラ「はい」
ロベルタ「……書庫に過去の資料がある。当時、関係者や警察から流してもらった情報だ。取ってきてくれ」
サンドラ「かしこまりました。が、その……なぜそこまで彼のことを気にかけるんですか？」
ロベルタ「ふふっ……内緒さ」

※ホテル、プール室
ＳＥ：水をパシャパシャさせる音

ルカ「まさか水着まで用意されてるとは……さすがジャンカルロ」
ルイーザ「用意周到よね。っていうか、シスコン？」
クレオ「シス……？」
ルカ「あーもうルイーザ、クレオに変な言葉教えないでよ」
ルイーザ「ごめんごめん」
ルカ「ジャンカルロはもちろん、エルダにも怒られるんだから。『大切な家族に品のない言葉を覚えさせないで』って」
クレオ「家族……」
ルイーザ「……クレオ」
クレオ「前みたいにパパとママとも暮らせたらいいなぁ。いつ帰ってくるんだろう」
ルカ「……」
クレオ「でも今は、みんながいてくれるからすっごく楽しいよ。みんな大好き！」
ルイーザ「っ……ありがとう、クレオ」（どこか切なげに）
ルカ「ルイーザ……」

※ジャンカルロの部屋
ＳＥ：紙にペンを走らせる音

ルカ「ねえ。今ちょっといい？」

ジャンカルロ「ルカ……？　ああ、いいよ」

※二人、向き合ってソファに座る

ルカ「あのさ……ルイーザ、最近悩んでるんだ。クレオのことで」
ジャンカルロ「クレオ……？　どうして」
ルカ「ほら、クレオには言ってないんでしょ。その……ご両親はもう、亡くなってるって」
ジャンカルロ「……ああ」
ルカ「でも、クレオはいつか二人が戻ってくるって信じてるんだ。そんなクレオに秘密にしたままでいなきゃいけないのは、罪悪感があるって……」
ジャンカルロ「……確かに、お前たちにまで隠しごとをさせているのは申し訳ないと思ってる。時が来たら、ちゃんとクレオにも本当のことを話す。だからそれまでは……」
ルカ「……わかった。ぼくがルイーザのことを支える」
ジャンカルロ「ありがとうルカ、助かる。……すっかり大人になったな」（微笑む）
ルカ「ジャンカルロたちがここまで育ててくれたおかげだよ。それと、男の友情さ」
ジャンカルロ「ふっ……そうだな」

※ヴァレンティーヌの部屋
ＳＥ：ドアを開けて中に入るジャンカルロ

ヴァレンティーヌ「……来たのね」（このシーンは素に近い話し方で）
ジャンカルロ「っ……」（いつもと違う様子に気づく）
ヴァレンティーヌ「貴方に質問があるの。いいかしら？」
ジャンカルロ「……何だ」
ヴァレンティーヌ「どうしてここに引っ越したの？　前に住んでいた街でも良かったでしょうに」
ジャンカルロ「別に。試しに劇場と提携してみたかっただけだ。新しいビジネスだよ」
ヴァレンティーヌ「よりにもよって、どうしてあの劇場なの」
ジャンカルロ「……ヴァレンティーヌ」
ヴァレンティーヌ「ジャンカルロ……私はもう、全部忘れたい」
ジャンカルロ「っ、君はまさか……」（もう疾患が治っていると思って）
ヴァレンティーヌ「教えて。本当の私は、どんなだったかしら。無邪気にはしゃいでた？　それともクールにすましてた？」
ジャンカルロ「……いいや。性根が悪い女だった」

ヴァレンティーヌ「あら、そうなの？」
ジャンカルロ「好きでもない男に気があるふりをして、好意を向けられた途端、手を振るんだ。バイバイってね」
ヴァレンティーヌ「酷い女ね」
ジャンカルロ「自分のことなのに」
ヴァレンティーヌ「だって覚えてないもの。……ねえ、ジャンカルロ。こっちに来て」
ジャンカルロ「……なに」

ＳＥ：布擦れ

ヴァレンティーヌ「私のこと、可哀想だと思ってるんでしょ」
ジャンカルロ「……」
ヴァレンティーヌ「……そんなに私を哀れむなら、貴方が私を愛してくれる？　……ねえ」
ジャンカルロ「……っ！」

ＳＥ：ジャンカルロ、ヴァレンティーヌの手を振り払う

ジャンカルロ「エルダ、いるか。エルダ！」

ＳＥ：エルダが走って部屋に入ってくる

エルダ「どうしたの！？」（何事かと心配して）
ジャンカルロ「ヴァレンティーヌが体調が優れないそうだ。診てやってくれ」
ヴァレンティーヌ「ジャン……（言いかける）」
ジャンカルロ「俺は用事がある」
ヴァレンティーヌ「……そうやって、貴方は逃げるのね」
エルダ「……」（ヴァレンティーヌの様子がいつもと違うことに気づく）
ヴァレンティーヌ「舞台に踊らされているのは観客。けれど、舞台で踊らされているのは役者のほうよ」
ジャンカルロ「俺もそうだと？」
ヴァレンティーヌ「貴方がまだ役者なら、ね」
ジャンカルロ「……」

ＳＥ：ジャンカルロ、部屋を出て行く

※劇場、支配人室

ロベルタ「なかった……？　資料が？」
サンドラ「はい……」
ロベルタ「まさか、盗まれたとか」
サンドラ「盗む……ですが、誰が何のために？」
ロベルタ「……アイツ……」（悔しそうに）

※アントニーの部屋
ＳＥ：マリエッタ、机上にファイルを置く

マリエッタ「これで良いんでしょ」

ＳＥ：アントニー、ファイルをめくる

アントニー「そう。おつかれさま」
マリエッタ「言われた通り、中は見てないわよ」
アントニー「本当に？」
マリエッタ「アタシだって役がほしいもの」
アントニー「……なら」

ＳＥ：アントニー、マリエッタの胸倉を掴む

マリエッタ「っ！」
アントニー「なぜこのページの内側にラメが付いてるの？」（このあたりから脅迫じみて）
マリエッタ「そ……そうなの？　知らなかったわ」

ＳＥ：布擦れ

アントニー「……君のマニキュアの色と同じに見えるけど」
マリエッタ「っ……」
アントニー「いざとなったら僕を脅そうとしたのか。でも残念だったね、君のずる賢さはどうやら半端なようだ。……次からは舐めた真似をするんじゃない。わかったな」

マリエッタ「……薄々気づいてたけど、貴方、仕事とプライベートじゃだいぶ印象が変わるのね。性根が腐ってそうだわ」
アントニー「僕はただ、目的のためなら何だってするだけだ」
マリエッタ「……アタシたち、やっぱり相性が良さそうだわ」

ＳＥ：ドアが開いてロベルタが入ってくる

マリエッタ「！」

ＳＥ：アントニー、ファイルをさっと隠す

ロベルタ「すまないね、取り込み中に」
アントニー「せめてノックはしていただきたかったですね。本当に取り込んでいたらどうなさるつもりだったんです？」（ここからはビジネスモードなので柔らかく）
ロベルタ「そのときは、ビデオに収めて脅迫材料にでもするよ。パトロンは多い方がいい」
マリエッタ「……サイッテー」（軽蔑して、ぼそっと）
ロベルタ「それより……アントニー、キミはうちの書庫に行ったことはあったかな」
アントニー「ええ、小道具の打ち合わせで使う資料を探しに」
ロベルタ「それだけかい？」
アントニー「はい」
ロベルタ「……そう、わかった。けれど、一つだけ忠告させてくれ。もしキミが余計なことに首を突っ込もうとしているなら……ワタシはキミをここから追放する」
マリエッタ「……」
アントニー「もちろんどうぞ。……ですが、どうしていきなりそんな話を？　何かあったんですか？」
ロベルタ「……いいや、何でもないよ……（小さく舌打ち）」

※フィオレンツァの部屋
ＳＥ：ティーカップを置く

イルマ「お嬢様。来月、高校の演劇部の公演があるんでしたよね。練習のほうはいかかですか？」
フィオレンツァ「うーん、まあまあかな。ちょっと衣装の制作が遅れてるけど」
イルマ「楽しみにしてますね。お嬢様の可愛らしいお姿を、しっかりとこの目に焼き付けね

ば……！」
フィオレンツァ「はいはい、興奮しないの。……あたし、将来は立派な女優になりたいんだ。
それでいつかマリエッタさんと組むの」
イルマ「ふふ、お嬢様ならきっと叶いますよ」
フィオレンツァ「ありがと、イルマ。あ、そうだ。アントニーさんの新作劇、イルマにもチケット用意してあげるから、友達でも招待しなよ」
イルマ「本当ですか！？　嬉しいです、ありがとうございます！　高校の同期を誘ってみようかしら」
フィオレンツァ「いいんじゃない？　ちなみに、どんな人？」
イルマ「ええと、卒業後は教会に……ああっ！」（お茶零す）

ＳＥ：イルマ、ティーカップを倒す

イルマ「わー、ごめんなさい！　またやってしまいました……」
フィオレンツァ「もー、本当にドジなんだから……」（笑いつつ）

※リリーの部屋

リリー「……こうしてユーリさんがわたしの部屋にいるなんて、何だか不思議な気分です」
ユーリ「私もです。……少し、緊張してしまいます」
リリー「ユーリさんでもそんなことあるんですか？」
ユーリ「ふふ、私は貴女が思ってらっしゃるほど大人じゃないんです。確かに、貴女よりは少しだけ長く生きていますけど」
リリー「……ユーリさんは、時々謎です」
ユーリ「謎？」
リリー「わたし、ユーリさんといると落ち着くんです。心が温かくなって、声を聞いているだけで微睡んでしまいそうなくらい心地良くて……。でも、どうしてでしょうね。ユーリさんのこと、わたしまだ全然わかっていない気がするんです。いっぱいお話しして、いっぱい笑い合ったのに、貴方のこと、ほんの少ししか知らない」
ユーリ「それは……」
リリー「ユーリさんはわたしに心を開ききってくれていないって考えちゃって、夜も眠れなくて……。お願い。ユーリさんのすべて、わたしに見せてくれませんか……？」
ユーリ「リリー……」

※時間経過、リリーの部屋
ＳＥ：電話着信音。リリー、電話に出る

リリー「……もしもし」
シルヴィア（電話）「あ、リリー。最近あんまり劇場に顔見せてないけど、大丈夫？」
リリー「うん、大丈夫だよ。ちょっと体調崩しちゃって。ここのところ寒暖差が激しいせいかな」
シルヴィア（電話）「心配だわ……ねえ、本当に大丈夫？　何かあったんじゃない？」
リリー「……さすが、シルヴィアには気づかれちゃうなぁ」
シルヴィア（電話）「……どうしたの？」
リリー「あのね……わたし、フラれちゃったの。好きな人に」
シルヴィア（電話）「え……？」
リリー「そんなつもりはないって言われちゃった。……ふふ、これが初恋かぁ。本当に、叶わないものなんだね」

※ホテル、ジャンカルロの部屋

ジャンカルロ「話というのは何だ」
ユーリ「……私にはこれ以上無理です」
ジャンカルロ「……リリーのことか」
ユーリ「どうしてあの子を騙さないといけないんですか。騙した後はどうするんですか。私にはわかりません。貴方の本当の目的は何なんです」
ジャンカルロ「なんだ、まさか本当に彼女に惚れたのか？」
ユーリ「ち、違います。私は……私はただ、貴方の役に立ちたくて」
ジャンカルロ「……俺は、君の気持ちには応えられない。そう前に言っただろう」
ユーリ「わかってます。……ジャンカルロ。貴方はまだ、あの方のことが（言いかける）」
ジャンカルロ「違う！」
ユーリ「っ……」
ジャンカルロ「……すまない」
ユーリ「……ジャンカルロ。貴方は、私の本名を覚えていますか」
ジャンカルロ「勿論だ」
ユーリ「そう……なら、いいです。コンプレックスだった私の外見を、貴方の駒として活用

してくださるなら、私はそれでいい」
ジャンカルロ「……家族であるお前に男の格好をさせてまで、どうしてこんなことをするのかと訊いたな。――これが、俺なりの復讐だからだ」

※劇場、廊下
ＳＥ：リリーの足音

リリー「あ……叔父様」
アントニー「リリー……」
リリー「……あ、あのね、叔父様。突然なんだけど、わたしこの間、生まれて初めて恋をしたの」
アントニー「え？」（少し驚く）
リリー「でも、フラれちゃって」
アントニー「……そう。残念だったね」
リリー「でもその人、わたしのことを褒めてくれたの。認めてくれた。それだけで嬉しいって、わたし気づいたの。今まで身長のことばかり気にして、踊ったところで誰もわたしのことなんて見てくれないって思ってた……その人に会うまでは。でも、これからはそんなこと思わないようにしようって決めたの」
アントニー「……リリー」
リリー「あ……ごめんなさい、お忙しいのに引き留めて、こんなこと」
アントニー「いいや……素敵な人と、出会ったんだね」
リリー「……！　……うん。本当はあの人に、わたしの踊ってるところを見てもらいたかったけれど」
アントニー「そう思えるようになったことも、その人のおかげなんだろう？」
リリー「ええ」
アントニー「……なら僕も、君を応援しようかな」
リリー「叔父様？」
アントニー「……いつかまた、会えるといいね」
リリー「……はい！」

※フィオレンツァの部屋
ＳＥ：ドアノック音

フィオレンツァ「ん？　イルマ……？」

ＳＥ：フィオレンツァ、ドアを開ける

フィオレンツァ「あ……」
アントニー「こんにちは」

※同・フィオレンツァの部屋

フィオレンツァ「すみません、イルマがいないとお茶も淹れられなくて……ほんと、何とかしなきゃとは思ってるんですけど」
アントニー「お気になさらず。こちらこそ、急に押しかけてしまってすみません」
フィオレンツァ「それで……訊きたいことって、何ですか？　あ、母がペルシャ猫飼おうか迷ってること、サンドラさんには内緒ですからね。彼女、犬派なんです」
アントニー「（戸惑いつつ）……わかりました。（咳払いして）そうではなくて、僕が伺いたいのは……支配人の誕生日についてなんです」
フィオレンツァ「誕生日？　えっと、再来月の十日です」
アントニー「ああ、そうでしたか。……支配人はどうも謎の多い方で、プロフィールも一切公開されていないようですから」
フィオレンツァ「ああ、けっこう警戒心強いんですよね。だからあまり個人情報は口にしたくないって昔からよく言ってて」
アントニー「なるほど……さすがですね」
フィオレンツァ「え？」
アントニー「ああ、いえ。ですが、これでプレゼントを贈り損ねることも免れました。ありがとうございます」
フィオレンツァ「プレゼント？　母のためにそこまでしてくださるんですか？」
アントニー「お母様のおかげで、この素敵な場所で劇をやらせていただけるんです。そのささやかなお礼ですよ」
フィオレンツァ「わあ、ありがとうございます！　母もきっと喜びます。父が亡くなってから母の誕生日を祝ってあげられるの、あたしとサンドラさんとイルマくらいですから」
アントニー「……失礼ですが、お父上は……？」
フィオレンツァ「えっと……亡くなったんです。七年前の火事で」
アントニー「それは……申し訳ありません」

フィオレンツァ「いえ！　当時のことはほとんど覚えていないですし、火事のときあたしは学校だったので。小さな蝋燭の火がカーテンに燃え移ったとか、あとは大きい声では言えないんですがマフィアがどうとかって話も聞いたことありますけど……あんな酷い火事になるなんて」
アントニー「……そのときちょうど公演中で、役者も観客も巻き込まれたとか」
フィオレンツァ「ええ、大勢亡くなりました。その頃、両親の仲はあまり良くなくて……結局、仲直りすることすら叶いませんでした。でも後になって母から、父はいち早く火事に気付いてみんなを避難させようとしていたと聞いて……」
アントニー「……そう、ですか」（違和感を覚える。トーン低めに）
フィオレンツァ「……ごめんなさい、暗い話になっちゃいましたね。でもこうして今、劇場は生まれ変わってくれた。きっと天国で父も喜んでいると思います」
アントニー「……ええ、きっとそうですね。……ああ、そうだ。この会話は、どうかオフレコでお願いします。支配人を誕生日当日に驚かせたいので」
フィオレンツァ「はい、任せてください」

※半年後。ホテル、ヴァレンティーヌの部屋
ＳＥ：ヴァレンティーヌ、カーテンを開ける。エルダが部屋に入ってくる

エルダ「おはようヴァレンティーヌ、調子はどう？」
ヴァレンティーヌ「おはよう。……エルダ、あそこの木の枝を見て。小鳥がとまっているの」
エルダ「え？　どれどれ……あら、本当」
ヴァレンティーヌ「あの子、脚や羽をちっとも動かさないの」
エルダ「そうなの？　せっかく羽があるのに、どうして飛ばないのかしら」
ヴァレンティーヌ「羽があるからって飛べる状態だとは限らないわ」
エルダ「……そうね。それにもしかしたら長い休憩に入ってるだけかもしれない。……ねえ、ヴァレンティーヌ。また、戻りたい？」
ヴァレンティーヌ「……さあ。……あの人は、元気にしているかしら。私を忘れてはいないかしら」

※劇場、支配人室

ロベルタ「ついにこの日がやって来たね、アントニー」

アントニー「ええ。記念すべき公演初日、必ずや劇場内を拍手で埋め尽くしてみせましょう」
ロベルタ「それは頼もしい。キミのことは食えない奴だと思っていたが、作品のクオリティーはワタシが保証する。流石だ」
アントニー「ふふ、ありがとうございます。では、僕は準備のほうに行ってまいりますので。失礼」

ＳＥ：アントニー、部屋を出て行く

サンドラ「……支配人、よろしいんですか？　あれだけ怪しいと疑っていらしたのに」
ロベルタ「どうせこの作品の公演が終われば任期満了だ。あれからワタシも探ってはみたものの、あの後アイツに特別な動きはなかった。……どちらにしろ、もう手は出せないだろうさ」
サンドラ「……？　はあ」

※支配人室前

マリエッタ「ねえ」
アントニー「っ……君はドアの前で待ち伏せするのが好きなの？」
マリエッタ「別にそんな趣味はないわよ。そんなことより……本当に主演にしてくれて、ありがと」
アントニー「約束は守る。それにこんなことをしなくても、君なら正々堂々この役を勝ち取れただろう。君の実力はわかってる」
マリエッタ「そ、そうなの？　なんだ、そうなんだ……やっぱりね、うん」
アントニー「とはいえ、気は抜かないようにね」
マリエッタ「わかってるわ。共犯者同士、互いに素敵な夢を見ましょ」

ＳＥ：マリエッタ、去っていく

アントニー「……やっと、始められる……ヴァレンティーヌ」

※ホテル、ヴァレンティーヌの部屋
ＳＥ：クレオが部屋に入ってくる

ヴァレンティーヌ「こんにちは、小さなクレオ」
クレオ「ねえ、どうしてヴァレンティーヌはどこにも行けないの？　どうして眠ってばかりいるの？」
ヴァレンティーヌ「そうね……本当は、もう何ともないはずなのに。私は舞台に戻りたくないだけなのよ」
クレオ「舞台？」
ヴァレンティーヌ「そうよ。苦しくて、辛くて、けれど大好きだった場所」
クレオ「じゃあ、クレオが連れて行ってあげる」
ヴァレンティーヌ「え……？」
クレオ「二人で行ったら、きっと迷子にならないもん」
ヴァレンティーヌ「……」

※ホテル、リビング
ＳＥ：ルカが駆けてくる

ルカ「見つかった！？」
ルイーザ「どこにもいないの、どうしよう……！」
エルダ「まさかクレオとヴァレンティーヌが同時にだなんて……」
ルカ「……もしかしたら、もう外に出ちゃったかもしれない」
ルイーザ「そんな！　ル、ルカ……あの二人、ちゃんと帰ってくるよね？　大丈夫よね？」
（泣きそうに）
エルダ「ルイーザ……」
ルカ「っ……大丈夫だよ、落ち着いて。まずはジャンカルロに報告しなきゃ」（しっかりしなきゃ、と自身を奮い立たせて）
ルイーザ「ルカ……」
ルカ「安心して、ぼくがついてる」
ルイーザ「……うん」

※教会

ジャンカルロ「オンディーナ」

オンディーナ「はい」
ジャンカルロ「私は何を懺悔すればいいんでしょう」
オンディーナ「……懺悔室で過ちの告白をされたいのでしたら、司祭？神父様をお呼びしましょうか」
ジャンカルロ「いえ、そういうわけではなく……。自分は何も成し遂げていないのではと思うことがたまにあるんです。努力も怠惰も見られているのであれば、私はきっと神からすれば相当な怠け者でしょう」
オンディーナ「……何も成し遂げたことのない人なんていませんわ。大きいことであれ小さいことであれ、完結させていくのが日々の積み重ねというものではないでしょうか」
ジャンカルロ「……完結、か」
オンディーナ「……あ、そういえば、ジャンカルロさんは越してこられてまだ半年ほどでしたわよね？」
ジャンカルロ「ええ」
オンディーナ「近くのトラモント劇場という所で、今日から新作劇の公演が始まるんです。どうやら人気の脚本家を採用したらしくて」
ジャンカルロ「ほう。トラモント劇場というと、確か……七年前に火事があったという」
オンディーナ「ああ、さすがに有名ですわね……そうなんです。犠牲者が多く出てしまって……」
ジャンカルロ「放火の疑いもあるというのを噂で耳にしたのですが、実際のところはどうだったのでしょう」
オンディーナ「うーん、わたくしも詳しいわけではありませんけれど……主演を務めるはずだった女優さんが急に降板になって、その恨みで火をつけたと言われているらしいです。証拠不十分で逮捕には至っていないようですが……。それからその他に……（以下小声で）マフィア絡みという噂もあるようですわ」

※ホテル、リビング
ＳＥ：ルイーザとルカが駆けてくる

ルイーザ＆ルカ「ジャンカルロ！」
ジャンカルロ「……どうした？」
エルダ「……クレオとヴァレンティーヌがいなくなった」
ジャンカルロ「は？」
ルイーザ「ごめんなさい、気づいたときにはもうどこにもいなくて……」
ジャンカルロ「……ふざけるな！」

ルイーザ「っ……！」
ジャンカルロ「何のためにこのフロアだけで生活できるようにしたと思ってる！　あの二人を自分たちの見えるところで守るためだろう！　それなのにどうして……！」
エルダ「ジャンカルロ、いいかげんになさい」（強めに）
ジャンカルロ「……何だと」
エルダ「貴女、私たちを何だと思ってるの？　手下か何かだと思っているようなら、勘違いしないで。私たちは家族よ。貴方の復讐に今まで付き合ってきたのはどうしてだと思う？　みんな貴方が好きだからよ。あの火事で夫と子どもを失った私も、両親を奪われたルイーザやルカも、ユーリも……貴方が手を差し伸べてくれたから今まで生きてこられた。だから貴方に協力したいと思った。それなのに、利用されるだけなんて……悲しすぎる」
ジャンカルロ「……これはお前たちの復讐でもあるだろう」
ルカ「違うよ、ジャンカルロ。……ぼくたちはもうとっくに、あの出来事を乗り越えてる。だけど、貴方とアントニーは違う。それに……貴方が本当にしたい復讐は、貴方個人のものでしょう」
ジャンカルロ「……！」
エルダ「貴方は自分の手を汚したくないだけなのよ。だからユーリ……いいえ、あの子にもあんな無茶なことをさせた。ねえ、いつまで逃げるつもりなの？」
ジャンカルロ「……」
ルイーザ「ジャン……カルロ……」
ジャンカルロ「……二人を探してくる。お前たちはここで待っていてくれ」
エルダ「……わかった」
ジャンカルロ「俺たちの家を、頼んだぞ」
ルイーザ＆ルカ「……うん……！」

※劇場前歩道
ＳＥ：雑踏、リリーの足音

ユーリ「リリー」（このシーンでは素のままで）
リリー「……！　ユーリ、さん……その格好」
ユーリ「ふふ、女みたいでしょう？　似合わないかしら」
リリー「い、いえ。とってもお綺麗です！」
ユーリ「ありがとう……今まで騙してごめんなさい。少し、話をさせてくれないかしら」

※劇場廊下
ＳＥ：ジャンカルロの足音

ジャンカルロ「支配人、お久しぶりです」
ロベルタ「おや、ジャンカルロ。チケットを送ったってのにいつまでも姿を見せないから、観に来ないのかと思ったよ」
ジャンカルロ「観させていただきますよ。ですがその前に、人を探していまして」
ロベルタ「おや、どんな人だい？」
ジャンカルロ「小さい女の子を連れた女性なんですが……」
ロベルタ「子どもは見た記憶にないねぇ。劇場の中にいるのか？」
ジャンカルロ「……実はそれも不確かなんです」
ロベルタ「そうか……まあ、ゆっくり探すといいさ。ワタシは挨拶周りをしてくるから、もう行くよ」
ジャンカルロ「ええ」

ＳＥ：ロベルタ、去っていく

ジャンカルロ「……あの人に接触していないとなると、いったいどこにいる……？」

※劇場内
ＳＥ：拍手

マリエッタ「ありがとうございました！」（舞台上。カーテンコール後挨拶）

ＳＥ：拍手が大きくなる

ノーラ「いやー、いい舞台でしたね」
サンドラ「……初めて貴女と意見が合いました」
イルマ「お嬢様、こんなに良い席をご用意してくださってありがとうございます。お嬢様からの愛がひしひしと伝わりました」
フィオレンツァ「いや、関係者席ってだいたいいつもこの辺りだから」
オンディーナ「わたくしの分まで貸してくださって、感謝いたしますわ」
フィオレンツァ「いえいえ。関係者ってうちあまりいないので、席埋めてくださってむしろ

ありがたいです」
シルヴィア「うう……さすがアントニー様……」（感動）
フィオレンツァ「うんうん、本当に凄かったよね。マリエッタさんもかっこよかったなぁ」

ＳＥ：ロベルタが舞台袖から歩いてくる

ロベルタ（マイク）「皆さんごきげんよう。このトラモント劇場の支配人を務めて、あっという間に月日が経ち……今日という素晴らしい日を迎えることができました。七年前の悲劇を乗り越え、ワタシたちは今後も良い作品をお届けできる場として成長してまいります。どうぞよろしく」

ＳＥ：拍手

ロベルタ（マイク）「ありがとう。ここで、今回の作品を手掛けてくれた脚本家にも登場していただきましょう。アントニー・フォルツァーノです」

ＳＥ：拍手と共にアントニーが舞台袖から歩いてくる

アントニー（マイク）「はじめまして、ご紹介にあずかったアントニー・フォルツァーノです。支配人の後の挨拶ということで緊張しておりますが、少々お付き合い願います。……突然ですが、こんな話をご存知でしょうか。昔、とある一人の女優がおりました。彼女には恋人がいましたが、不運が重なりあるとき一人の男と関係を持ってしまいます。彼はなんとファミリーに所属する人間で、その後も女優を脅して関係を迫り続けました。しかしこれまた不運なことに、その男には妻子がいて、しかも妻は彼女が当時主演を予定していた舞台の劇場支配人だったのです」
ロベルタ「……！」
アントニー（マイク）「支配人は二人の関係に気づき、彼女を舞台から強制降板させました。さらに業界内での地位も貶め、その女優は演劇界から追放される形になりました。その後、劇場を汚（けが）した夫に支配人は離婚届を叩きつけ、彼を追い出しました。すると逆上した夫は、公演中の劇場に火を放ち―」
ロベルタ「アントニー、もうやめろ！　何を言って……（ジャンカルロに押さえつけられる）っ！」

ＳＥ：布擦れ

ジャンカルロ「（息をついて）……間に合った」

ロベルタ「ジャンカルロ……！　いったいどういうことだ！」
アントニー（マイク）「彼は、僕の友人です」
ロベルタ「……何だと？」
アントニー（マイク）「かつて同じ劇団に所属していた仲間でした。……さて、話を戻しましょう。マフィアの男……支配人の夫の手による放火で、劇場は大惨事になりました。大勢の人が死に、生き残った人や遺族、誰もが深い悲しみと傷を負った。しかし、当の男自らもその場で命を落としたことから、支配人は火事の原因をうやむやにしました。その結果、放火説が浮上した際に真っ先に疑われたのは、支配人に主役を降板されて恨みを抱えているであろう例の女優でした。その後、女優は精神を患い、表舞台から完全に姿を消しました」
ロベルタ「っ……」
アントニー（マイク）「誰の話をしているか、もうおわかりですよね……ロベルタ支配人」

ＳＥ：劇場内のざわつき

フィオレンツァ「……そんな……」
シルヴィア「フィオレンツァ……」

ＳＥ：フィオレンツァ、立ち上がる

フィオレンツァ「お母さん、どうして……！　お父さんはみんなを避難させようとして巻き込まれたって……」
ロベルタ「……ジャンカルロ」
ジャンカルロ「はい」
ロベルタ「最初からこのつもりで、うちと提携しようと言ってきたのか」
ジャンカルロ「ええ。この半年間、貴女の注意の矛先がアントニーに向いている間、私が調査を続けていました」
ロベルタ「……なるほどね。じゃあ、アントニーがパーティーでシャンパンを零したのも、作戦のうちだったってわけだ。はー、まんまとやられたよ。……それで？　キミたちはこれからどうしたいんだい？」
アントニー「この劇場には正直、存在ごと消えていただきたいですが、それでは貴女の娘さんがあまりにも気の毒だ。……まずは、罪を償ってください」
ロベルタ「……フィオレンツァ」
フィオレンツァ「お母さん……」
ロベルタ「……すまなかった。すべての人に、心から謝罪をしよう」

※時間経過、劇場内

アントニー「……この劇場は、どうなるかな」
ジャンカルロ「さあな。しばらくは何も公演できないだろう。お前のせっかくの脚本がもったいないよ」
アントニー「それを言うなら、他の制作スタッフたちもそうだ。真相を暴くために仕方なかったとはいえ……さすがに申し訳ないよ」
ジャンカルロ「お前はいつもそうだ。考えが甘い。……だからヴァレンティーヌは……」
アントニー「……ジャンカルロ」
ジャンカルロ「お前が彼女の隣にいてやれば、彼女を救えていたかもしれない」
アントニー「……その通りだ。仕事とはいえ、彼女と長期間離れていたことにもっと慎重になるべきだった。そうしたら彼女は、あんな男と出会うこともなかった」
ジャンカルロ「……どうしてヴァレンティーヌは、お前を選んだんだろうな」
アントニー「……」
ジャンカルロ「俺は……お前のことをどうしても許せない。たとえこの劇場への復讐が終わったとしても。だから……お前の大切なものを、奪うことにした」
アントニー「……どういうことだ？」
ジャンカルロ「今頃、ロシア行きの便に乗っているだろう。自分が愛した相手が実は女で、一人見知らぬ国においていかれるとも知らずにな」
アントニー「リリーか……ジャンカルロ、君はなんてことを……！」

ＳＥ：ヴァレンティーヌとクレオの足音

ヴァレンティーヌ「いいえ、今頃乗っているのはパリ行きの便よ」
ジャンカルロ「っ！」
アントニー「……！　ヴァレンティーヌ！　クレオ！」
クレオ「お兄さまー！　あっ、アントニーもいるー！」
ジャンカルロ「お前たち、今までどこに行ってたんだ……！」
ヴァレンティーヌ「その二人に会ってたのよ。ユーリとリリーにね」
ジャンカルロ「っ……なぜ……」
ヴァレンティーヌ「……ユーリは貴方の目的を見抜いていたの。だからこうなることもわかってた。二人はパリに行くそうよ。でも、貴方の思惑通りにバレエから離れるわけじゃない。知り合いがいない土地でまた一から始めたいって、彼女たち自身が決めたそうよ」
ジャンカルロ「……何だよ。じゃあ俺は、こいつに復讐することすらできないってわけか？

それなら俺には何が残る？　ここまでしてきたのは何のために……！」
クレオ「――クレオたちがいるよ」
ジャンカルロ「……！」
クレオ「お兄さまは、クレオたちがいるだけじゃ、だめ？」
ジャンカルロ「クレオ……」
ヴァレンティーヌ「ねえ、ジャンカルロ。もう、苦しむのはやめにしましょう。私たち全員、お互いに。私ももう、誰かに守られるのはやめる。だから貴方にも、前に進んでほしいの」
ジャンカルロ「（深いため息を吐いて）……クレオ、おいで」
クレオ「うん」

ＳＥ：クレオ、ジャンカルロに駆け寄る

ジャンカルロ「……俺たちの両親は、お前が三歳のときに交通事故で亡くなった。だからもう、会えないんだ」
クレオ「……そっか」

ＳＥ：ジャンカルロ、クレオを抱き締める

ジャンカルロ「ずっと言えなくて、悪かった。ごめん。ごめんな……」
クレオ「……いいよ。なんとなくわかってたから。それにね、お兄さま」
ジャンカルロ「ん？」
クレオ「クレオたちには今、いーっぱい家族がいるでしょ？」
ジャンカルロ「……ああ。そうだな……」

ＳＥ：ヴァレンティーヌの足音

ヴァレンティーヌ「アントニー。私の心が蝕まれて貴方を拒絶してしまったこと、謝るわ。それに……裏切ってしまったことも」
アントニー「いいんだ。君をジャンカルロに預けて正解だったと思ってる。僕たちはもう、元の関係には戻れないと思うけど」
ヴァレンティーヌ「違う形でもいい。三人で劇団にいたときみたいじゃなくても、貴方と私が恋人じゃなくても、新しい関係を作っていけばいいわ。だって、私たちはそうやって、舞台を作り上げてきたんですもの。そうでしょ」
アントニー「……君は逞しくなったね」
ヴァレンティーヌ「だって私……まだ、女優ですもの」

シルヴィアN「その後、彼らがトラモント劇場を去るとき、私はアントニーさんにこう尋ねた」

シルヴィア「アントニーさんは、舞台書くの……やめないですよね？」
アントニー「熱はいつか冷める。僕はもう冷めきった」
シルヴィア「それでもわたしは、貴方の書く物語が大好きです」

シルヴィアN「思えばそれは、初めての恋の告白だったのかもしれない。そして……それぞれが、それぞれの舞台を歩き始めた」

※五年後。トラモント劇場役者控室

フィオレンツァ「あーもー緊張するー無理ー」
シルヴィア「だだだ大丈夫！　きっと上手くいくよ！」
マリエッタ「なんで貴女のほうが強張ってるのよ……脚本ならこの五年でさんざん書いてきたでしょ」
シルヴィア「だ、だって、この劇場でやるのは初めてですし」
マリエッタ「大丈夫よ、クオリティーはアタシが保証するわ。ほら、フィオレンツァも！　ちゃーんと背筋伸ばしなさい」
フィオレンツァ「は、はい……！」
マリエッタ「肩に力入りすぎ。もう……このアタシが主役を譲ってサポート役に回ってあげるのよ。失敗なんて絶対にさせないわ」
フィオレンツァ「マ、マリエッタさぁん……」
マリエッタ「お母さんに反対して、ここ閉業するの留まらせたんでしょう？　だったらいっそ、この劇場を伝説にしてやりましょう」
フィオレンツァ「……はい……！」

※パリ、ユーリとリリーのマンション
ＳＥ：リリーが帰ってくる

リリー「アンナさん！　次の公演でやる『ジゼル』、メインの役受かりました！」（「アンナ」＝ユーリの本名）
ユーリ「本当！？　おめでとう、リリー……！　今夜はお祝いね」
リリー「ありがとうございます！　ユーリさんのご飯、とっても美味しいから楽しみです」
ユーリ「でも、食べ過ぎには注意しなきゃね」
リリー「大丈夫です、その分めいっぱい動きますから！」

※教会

イルマ「オンディーナ」
オンディーナ「あら、ごきげんようイルマ。予定よりちょっと早かったですわね」
イルマ「待ちきれなくてついね。お嬢様たちの舞台、楽しみでしかたないの。……ねえ、凄く熱心にお祈りしてたけど、何を祈ってたの？」
オンディーナ「そうですね……舞台の成功と、遠くで生きているあの方に、幸あるように」

※バー
ＳＥ：グラスを交わす

サンドラ「あー、昼間から飲むお酒ってどうしてこんなに美味しいのかしら……」
ノーラ「男にフラれてガン泣きしてすっきりした翌日に飲むお酒だからじゃない？」
サンドラ「うるさい。だいたいなんで変な男からしか声がかからないのよ。まったく、あんな劇場で秘書やってたせいかろくな運回ってこないわ……」
ノーラ「まあまあ、飲みなって。ところでサンドラ、良い話があるんだけどさ……」
サンドラ「もう面倒ごとはごめんよ」
ノーラ「金持ちが多く出席するパーティーなんだけど」
サンドラ「……詳しく聞かせて」

※ジャンカルロの邸宅、玄関

ルカ「ルイーザ、ジャンカルロたちは？」

ルイーザ「向こうで合流してから来るって言ってたわ」
クレオ「ねえ、エルダは本当に行かないの？」
エルダ「私はいいかな。ここでみんなが帰ってくるのを待ってる」
ルイーザ「今日のお夕飯はハンバーグがいい！」
エルダ「はーい、了解。じゃ、気をつけていってらっしゃい」

※トラモント劇場前
ＳＥ：ヴァレンティーヌの足音

ヴァレンティーヌ「お待たせ」
ジャンカルロ「お、売れっ子女優のお出ましだ」
アントニー「仕事、休みとれて良かったね」
ヴァレンティーヌ「ええ。だって絶対来たかったんですもの、頑張ってマネージャーを説得してきたわ。……私はあそこの舞台に立つことはできなかったけど、いつかまた機会があるかもしれないし、見ておきたいの。空気感や湿度、ぬくもり、声の響き方。私たちにとって、それらはすべて研究材料だもの」
ジャンカルロ「あー、さすがヴァレンティーヌは勤勉だな」（どこか楽しそうに）
アントニー「ほんと、劇団時代に戻ったみたい。（軽く笑って）……さて、それじゃあ行こうか」

ＳＥ：ジャンカルロとアントニーが歩き出す

ヴァレンティーヌ「……ねえ、二人とも」

ＳＥ：足音が止まる

ヴァレンティーヌ「また三人で舞台、やりたいわね」
ジャンカルロ「ああ」
アントニー「うん」（ジャンカルロとタイミング合わせる）

Ｆｉｎ